

大胆と小心（上）

——伊勢物語とその歌——

上野英二

一

『伊勢物語』「第十五段は、ちょっと風変わりな段である」と言う。「男女が、お互いの浮気心を、短歌のやりとりで責めあう。その応酬がエンエンと続いている」（俵万智『恋する伊勢物語』）。

昔、男ありけり。うらむる人をうらみて、

鳥の子を十づ、十は重ぬとも思はぬ人を思ふものは

と言へりければ、

朝露は消え残りてもありぬべし誰かこの世を頼みはつべき

また、男、

吹く風に去年の桜は散らずともあな頼みがた人の心は

また、女、返し、

ゆく水に数書くよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

また、男、

ゆく水とすぐるよはひと散る花といづれ待て、ふことを聞くらむ

あだくらべかたみにしける、男、女の、忍び歩きしけることなるべし。

(定家本)

どこが「風変わり」なのか。しばらく俵万智『恋する伊勢物語』の解説によって物語を辿ってみる。同書の解説は、ほぼ通説に従っている。

書き出しには、「むかし、男ありけり。うらむる人をうらみて」とある。男は、浮気な自分のことを怨む女を、おまえこそ浮気心いっばいのくせにと逆に怨んで、こんな歌を詠んだ。

(歌略)

鳥の子とは、鳥の卵のことで、それを十個ずつ十回（つまり百個！）重ねることができたとしても、というのが上の句。そんなありえないことが仮におこったとしても、私のことを思ってくれないあなたのこと

を、こつちだつて本気で愛したりしませんよーだ、というのが下の句である。

（中略）

さて、卵を百個重ねても……の歌を受け取った女からは、こんな歌が返ってきた。

（歌略）

はかない朝露も、消えずに残るということが。まれにはあるでしょう。けれど、あなたと私の関係は（露よりもはかなく）あてにすることなどできませんわね……。

女も、負けてはいない。卵百個ほどの意外性はないものの、結構キツイ内容を、なめらかにケロリと詠んでいる。そこでまた、反撃に出る男。

（歌略）

吹く風に去年の桜が散らない、というようなことがあったとしても、ああ、あてになりませんねえ、あなたの心は……。

男はどうやら「ありえないことシリーズ」のようである。

ならばこつちも、というように、女は返してきた。

（歌略）

流れる水に数を描くよりもはかなくて空しくて無駄なことは、私を真面目に愛してくれないあなたを思うことだわねえ……。女は、「はかないシリーズ」である。

今度はこの歌の「ゆく水」を受けて、男は歌を作ってきた。

(歌略)

流れる水、過ぎゆく齡、散る桜——いずれが「待ってくれ」ということを聞いてくれるだろうか。なーんにも永遠のものなんか無いのさ。なーんにもあてにならないのさ。

——そんなにお互いを信じられなくてキライなんだったら、歌のやりとりなんかしなければいいのに、と思うのは、私だけでしょうか？

「短歌のやりとり」が「エンエンと続いて」結局のところ、「なーんにもあてにならないのさ」と言うのであれば、確かに「そんなにお互いを信じられなくてキライなんだったら、歌のやりとりなんかしなければいい」ということになるであろう。

諸注釈もこの結末を考えあぐねて、この段の成立過程を詮索することにもなる。果して、この段は何を語ろうとした段であったのか。

再び出発点に戻って考え直してみる。

「昔、男ありけり。うらむる人をうらみて」。同書はこれを、「男は、浮気な自分のことを怨む女を、おまえこそ浮気心いっぱいのくせにと逆に怨んで」とする。男は、女の「怨み」に「怨み」を以って応じた、と解する。一首目の男の歌は、「私のことを思ってくれないあなたのことを、こっちだって本気で愛したりしませんよーだ」。二首目、女の返歌は、「あなたと私の関係は（露よりもはかなく）あてにすることなどできませんわね……」。三首目は男の「反撃」、「あてになりませんねえ、あなたの心は……」。四首目、「ならばこっちも」とい

う女の返歌、「はかなくて空しくて無駄なことは、私を真面目に愛してくれないあなたを思うことだわねえ……」。一連の遣り取りは、お互い相手への不満を並べ立てた「怨み」節の応酬となっているように見える。確かにこれでは、五首目で結局、「お互いを信じられなくてキライ」ということになってしまふであろう。

しかし、この一連の遣り取りの発端となった「うらみ」とは、相手に対して不満の気持を抱いて「怨む」ことであつたのだろうか。

本居宣長『源氏物語玉の小櫛』は、『源氏物語』帚木、

怨すべきことをば、見知れるさまにほのめかし、うらむべからむふしをも、憎からずかすめなさは、それにつけてあはれもまさりぬべし。

に注して、

怨ずるは、心に恨めしく思ふこと、うらむべからむふしは、恨みを言ふべきふしにて、心に思ふかたと、言に言ふかたとを、二つに分て言へる也。

と言う。すなわち、「うらむ」とは、相手を不満に思うだけでなく、「言に言ふかた」、その不満の気持を口に出して訴える行為を意味するものでもあつたのである。

なぜ不満に思うのか。それは欲求不満、愛情の裏返しに他ならないであろう。なぜそれを訴えるのか。それは求愛の表現に他ならないであろう。

とすれば、この段の物語の発端の様相は一変することになる。まず、「うらむる人を」、女は単に男を怨んだのではなく、恨み言を言つて来た。欲求不満の原因は、男の不実、浮気心であつたらう。「どうして私を、私だけを思つてくれないの」。恐らく男には、別に女がいたのではないか。

「うらむる人をうらみて」。これに対して、男の方も逆に女に恨み言を言つたと言う。そう言つて来た女への不満を訴えたのである。「どうしてそんなことを言うのだ。そんなことを言うのは、お前の方こそ、私のことを思つていないからじゃないのか」。

結局、二人は「うらむ」ことによつて、互いに相手の気を引いたのである。「うらむる人」、まず女は男に対してすねて見せた。それに男はまともに取り合わず、逆にすねて見せたのである。「うらむる人をうらみて」というこの段の発端は、怨みの気持を抱いている相手を逆に逆怨みしたということではない。現代語の感覚で、この「うらむ」を速断するのは危険であらう。五段活用と上二段活用、「うらむ」という語は、古典語と現代語とは、意味も活用も違ふのである。

従つてこの段は、お互いの怨みの気持から始まるのではない。二人には十分愛情があつたのである。ただし、その愛情は必ずしも真実一途なものではなかつたようだ。どうもこの二人には、それぞれ別の相手がいたようなのである。どうやら二人の恋は、あそびのそれであつたらしい。二人は相等の恋のつわもの、恋の手垂れではなかつたか。

さて、恨み言を言つて来た女に対する男の返歌。「鳥の子を十づ、十は重ぬとも」、男は大袈裟に『説苑』などに見える「累卵」の故事を引いた。「危きことを累卵と言ふ」（『勢語臆断』）。「そんなありえないことが仮におこつたとしても、私のことを思つてくれないあなたのことを、こつちだつて本気で愛したりしませんよーだ」。しかしそれは、拒絶の表現だったのである。「しませんよーだ」は当然本心ではない。「私のことを思つてくれ」さえすれば、いつでも「本気で愛し」ます、ということであつたのであろう。「私のことを思つてくれないあなた」というのが、男の愁訴。すなわち、「うらむる人をうらみて」というこの歌も、求愛の歌であつた。

あるいは、この歌の「思はぬ人」とは、この「うらむる人」という、相手の女ではなかつたかも知れない。男の浮気の相手を、この女の手前、「私のことを何とも思つていないような女」と言つて見せたのか知れない。「たとえどんな奇跡が起きたとしても、（お前と違って）私を思つてくれないような女のことを思つたりするものかよ」。その方が、「鳥の子を十づ、十は重ぬとも」という大袈裟な喩えは生きて来るかも知れない。

男はわざと大袈裟な喩えを引き合ひに出して、女の心を取り結ぼうとしたのである。その場合、男の「うらみ」とは、女が恨み言を言つて来たこと、それ自体への恨み言となる。いづれにしても男は、女へ求愛の歌を送つたのである。それに対する女の返歌、「朝露は消え残りてもありぬべし」。男からの歌に対して、「はかない」こと、「ありえないこと」を詠んで応酬する。その点では確かに、「女も、負けてはいない」。しかし、この歌は「結構キツイ内容」の歌だつたのであろうか。下の句「誰かこの世を頼み果つべき」は、「あなたと私の関係は（露よりもはかなく）あてにすることなどできませんわね……」という、これも拒絶を意味する表現だつたので

あろうか。

ここに詠まれた「世」とは、言われるように「あなたと私の関係」、すなわち男女の仲であろう。しかし、それを「頼み果つ」とはどういうことか。「あてにする」ということだけで済むであろうか。「果つ」は、最後までやりきること、という意味を上接の語に付け加える。とすれば、「頼み果つ」は、最後まで頼みにするということになるであろう。他ならぬ男女の仲について、「頼み果つ」と言うのであるから、「この世を頼み果つ」とは、男を全面的に信頼しきることになる。女は、そこまであなたを信頼しきることはできません、と答えたのである。一般的に男を拒絶したわけではない。男の贈歌程度では、まだまだ不十分、全面的に信頼しきることは出来ないと訴えたのである。ということは、男を少しは信じているのである。欲しいのは全面的に信頼しきっても大丈夫だという確証なのである。この歌もやはり、求愛の歌であった。

「うらむる人」、女は、男の不実をなじった。「うらむる人をうらみて」、それに対して男は、女が男の愛情に疑問を持ったこと、それ自体に文句を言ってよこした。「私のことを思ってくれないあなたのことを、こっちだつて本気で愛したりしませんよーだ」。その歌の、言葉とは裏腹の、男の求愛の本音の部分に、女は正確に応答したのである。

例えば、『伊勢物語』五十五段。

昔、男、思ひかけたる女の、え得まじうなりての世に、

思はずはありもすらめど言の葉のをりふしごとに頼まるゝかな

この男は、女との「世」を、「言の葉」ゆえに頼みに思っている。恋する男女は、「頼む」に足る「言の葉」を求めるのである。五十段の女も、身を任せるに足る、「言の葉」を男に期待した。

しかし、男もそう一筋縄では行かない。そう言う、女の期待をはぐらかす。「あな頼みがた人の心は」。男のさなる返歌は、なおも女の不実を衝くものであった。「あな頼みがた」の裏には、やはり女の愛情、それを保証する「言の葉」が要求されている。男にとつても、この女を信頼しきれない何かがあったのであろう。男は今度は上の句に、「吹く風に去年の桜は散らずとも」の一句を据えた。わざわざ「去年の桜が散らない」と言うところを見ると、二人の間には、その前に桜が散った、と言うべき事件があったのかも知れない。「吹く風」に桜が散るとは、女が他の男の手に落ちたことを寓意するものではなかったか。

例えば、『伊勢物語』十七段。

年頃おとづれざりける人の、桜の盛りに見に來たりければ、あるじ、

あだなりと名にこそ立てれ桜花年にまれなる人も待ちけり

返し、

今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや

私見によれば、この「あるじ」とは、「街道筋や浦の泊などにあつて旅人の心を慰めた長者の女など」の「遊

女的」な（江馬務「遊女変遷略史」、『江馬務著作集』所収）女性であつて（拙稿「伊勢物語のあそび」、『文学季刊』第一〇巻第四号）、自他ともに「あだなり」と認められる女であつた。女は自身を桜に見立てながら、滅多に來ない男ではあつても、久しぶりに訪ねて来てくれたことに對して、誠実を取り繕つた。「年にまれなる人も待ちけり」。かねて女の多情を知る男は、阿吽の呼吸でその趣向に乗つて、歌を返した。今日自分が來なければ、明日は降る雪のようにその花も散るのだらう。そんなものなら、たとえ消え残つたにしても、それを花として見られるだらうか。「桜花」が「雪とぞ降りなまし」というのは、女が他の男の手に落ちることの譬喩的表現であつたと思われる。

「去年の桜は散らずとも」についての、前の年に云々は、少し詮索が過ぎたかも知れない。しかし、少くとも五十段のこの歌の表現の背後に、女の多情への危惧があつたであらうことは考えられてよい。男に負けず劣らず、女もなかなかのあそび人だつたのではなからうか。

しかし、女の「うらみ」から始まつた二人の遣り取り取りも意地の張り合いのまま二番勝負を終え、双方譲らず。勝敗が決しないまま、三回戦に突入する。女は再び、「はかない」ものを持ち來たつて、「朝露」に代えて「ゆく水に数書く」ことを詠出した。⁽¹⁾「流れる水に数を描くよりもはかなくて空しくて無駄なことは、私を真面目に愛してくれないあなたを思うことだわねえ……」。一見それは、前の三首の歌と同じ構造であつて、二回戦「あなたと私の関係は（露よりもはかなくて）あてにすることなどできませんわね……」の二番煎じに過ぎないように見える。だが、この歌は「朝露は」の歌などとは決定的に違ふところがある。それは、いずれも上の句に「はかない」ものの代表格を持つて來ることを一首の趣向としながら、下の句の落ち着く先が相手の不実ではなくて、

自分の心の「はかな」さに向う点であろう。この歌の「はかなき」とは、相手の心が、ではなくて、「思はぬ人を思ふ」ことだ、と我が身にかけて言ったのである。

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

（一〇三段）

「はかな」とは、消え入ってしまふような、何とも捉え所もなく切ないこと。そういう恋心は、「ゆく水に数書くよりもはかなき」ものだと気が付いた、と言うのである。「私を真面目に愛してくれないあなたを思うこと」は、「空しくて無駄なこと」だ、とそっぽを向いているのではない。

流れる水に数書くよりも切ないことは、思ってもくれない人を恋することだったのね。意地の張り合いから一転、女ははしなくもいじらしいところを見せて、男に甘えて見せたのである。女は、折れて出たのであろう。この女に弱みを見せられれば、男とていつまで意地を張り通してはられない。その機を逃さず、男は即座に「ゆく水とすぐるよはひと散る花と」と切り込んで行った。「いづれ待て、ふことを聞くらむ」。流れる水も桜も人生も、一刻とても待った無し。ならば即刻逢おうでないか。男はそれまでの遣り取りをすべて引き取って、落とすべきところへ女を導いた。

女にもその気があるとすれば、いつまでも言葉を弄んでいる暇は無いはず。女の側からの歩み寄りをこれ幸いと、男はそれに乗ったのである。

五十段の一連の遣り取りを締め括るこの歌の歌うところは、「なーんにも永遠のものなんかはないのさ。なーん

にもあてにならないのさ」ということではないであろう。この二人は、そんな虚無主義へ陥って行つたわけではない。

物語結文は言う。

あだくらべかたみにしける、男、女の、忍び歩きしけることなるべし。

二人は、酸いも知り甘いも知つた、あそび人だったのである。この段の恋歌のラリーは、そういう二人の、丁々発止火花散る、恋の戯れであつたのではないか。そこに「そんなにお互いを信じられなくてクライなんだつたら、歌のやりとりなんかしななければいいのに」という解釈の成り立つ余地は恐らく無いであろう。

お互い恋の呼吸を分きまえた者同志、男の浮気症に女がすねたところから始まつた痴話喧嘩も、恋の駆け引きをそれはそれなりに楽しみつつ、結局行き着くところへ行き着いて、一件落着。二人はめでたく元の鞘に戻つたのである。

この世は無常だ、時間は待つてはくれない。だからこそ恋をしようではないか。「ありえないことシリーズ」
「はかないシリーズ」いずれにしても五十段の男は、無常の典型と言うべきものを並べ立てながら、それをすべ
て引き取って、無常など物ともせず、女に迫って行った。むしろ彼は、無常を梶子に現在只今を謳歌しようと
した。

しかしながら、本来無常と言えば、それは悲嘆すべきものであつたはずである。

例えば、『萬葉集』大伴家持、その名も「世間無常を悲しぶる歌」。

天地の 遠き初めよ 世の中は 常無きものと 語り継ぎ 流らへ来たれ 天の原 振り放け見れば 照る
月も 満ち欠けしけり あしひきの 山の木末も 春去れば 花咲きにほひ 秋づけば 露霜負ひて 風交
じり 黄葉散りけり うつせみも かくのみならし 紅の 色も移ろひ ぬばたまの 黒髪変り 朝の笑み
夕へ変はらひ 吹く風の 見えぬが如く 行く水の 止まらぬ如く 常も無く うつろふ見れば にはたづ
み 流るる涙 留めかねつも
(卷十九・四一六〇)

「花咲きにほひ」「黄葉散りけり」、「うつせみもかくのみならし」、「ゆく水の止まらぬ如く」。ここには、『伊勢
物語』五十段が「ゆく水とすぐるよはひと散る花と」と並べ立てた無常の典型がすでに顔を揃えている。

しかしその行き着くところ、結論は「常も無く 移ろふ見れば」、「流るる涙 留めかねつも」という悲傷で

あった。まさに「世間無常を悲しぶ」。それが、伝統的な無常感というものであった。

しかし、『伊勢物語』の男は、無常など歯牙にも掛けない。無常感などどこ吹く風、むしろ彼は、無常を逆手に取って恋に突き進んで行く。

例えば、九十段、

昔、つれなき人をいかでと思ひわたりければ、あはれとや思ひけむ、「さらば、あす物越しにても」と言へりけるを、限りなく嬉しく、また疑はしかりければ、面白かりける桜につけて、

桜花けふこそかくもにほふともあな頼みがたあすの夜のこと

といふ心ばへもあるべし。

桜の花は今日は美しく咲き匂っていても、いつ散るか分らない。同じ事なら、今を楽しもうではないか。「散る花」という無常の典型を持ち出しながら、逆にそれを口実に使って恋に突進しようとした五十段の男と同じ。「あな頼みがたあすの夜のこと」。それは、五十段「いづれ待て、ふことを聞くらむ」と同じ理窟であった。そこに感傷は無い。事、恋に関する限り、『伊勢物語』の男は、無常など一向に意に介さなかった。

「『伊勢物語』には、恋のためには多少の障害など乗り越えて行くという、激情の恋を描く物語が満ちている」(拙稿「渡河の情景―伊勢物語ノート―」、『成城国文学論集』第二十八輯)。「身分違いの恋、許されざる恋、様々の制約や障害などには目もくれぬ、激しい恋を、『伊勢物語』の男はしたのである」(拙稿「狩と恋―伊勢物

語ノート―、『成城国文学』第十六号）。例えば、「二条の後」だと言う深窓の令嬢を攫って逃げる六段の恋。神聖侵すべからざる「伊勢の齋宮」との六十九段の恋。恋に掛けては、『伊勢物語』の男は、勇猛果敢、大胆不敵。文字通り胆の大なる者であった。恋のためには後先顧ず、向う見ずに突き進んで行く。勢い、その歌も大胆なものとなった。

五十段、「ゆく水と」の歌に先立つ歌にも、無常の数々が素材として採り上げられていたが、それらはすべて相手への恋情を訴えるための、言わば、だしとして使われたものであった。むしろ、それらの歌の工夫は、無常の中の無常を大胆に仮構して見せることによって、その恋心の大きさを際立たせようとした点にある。

「朝露は消え残りてもありぬべし」、「吹く風に去年の桜は散らずとも」、「ゆく水に数書く」。前二者は、無常の極みと言うべきものが、永遠不変となることを反実仮想し、それを逆手に取って、たとえそんなあり得ないことがあったとしても、愛しません、信じませんと、恋心を訴えるものだし、「ゆく水に」の歌も、無常の極みより、一層無常だと言うことによって、恋心の微妙さを訴えるものであった。女も、男の攻勢に呼応して、負けず劣らずの勢いで、それに応じた。

「鳥の子を十づ、十は重ぬとも」も同断。これも、必ずしも無常ということではないけれども、あえて大胆な仮構をすることによって、逆に恋情の大きさを表現しようとしたものであろう。

『古今和歌六帖』にも、これら五十段の歌によく似た歌が集められている。

女を離れて詠める

紀友則

(中略)

雁の子を十づ、十は重ぬとも（人の心をいかゞ頼まむ）

(中略)

置く露を消たて玉とはなしつとも（人の心をいかゞ頼まむ）

(中略)

在原時春

(中略)

散らずして去年の桜ありぬとも（人の心をいかゞ頼まむ）

紀貫之

(中略)

行く水に降りくる雪はとまるとも（人の心をいかゞ頼まむ）

紀友則、在原時春、紀貫之、凡河内躬恒の四人が、競って「人の心をいかゞ頼まむ」を下の句とする歌を詠んでいる。在原時春は、業平の孫。ここには『伊勢物語』に做つたかの如き、⁽²⁾無常の素材が並んでいる。

しかし、下の句はすべて、「人の心はいかゞ頼まむ」であつて、「女を離れて」の嘆きに留まる。これらと五十段の歌の下の句とを対照するならば、『伊勢物語』の歌の恋への積極は歴然としていよう。「思はぬ人を思ふもの

かは、「誰かこの世を頼み果つべき」の強い反語、「あな頼みがた人の心は」の倒置に詠嘆、いずれも相手への恋心を訴えて、強い表現となっている。

五十段では、上の句に無常の極みを大胆に仮構し、さらに下の句では、それさえも克服しようと言う、それに劣らぬ強い表現によって恋心が詠出される。しかも、それらの応酬はいずれ劣らぬものであって、互いに大胆を競い合い、その表現をエスカレートさせて行くのである。

五十段の遣り取りは、まさしく「あだくらべ」と言うにふさわしいものであった。事の起りは、「うらむる人」、女の「うらみ」ごとであったが、実質的には、男の「鳥の子を十づ、十は重ぬとも」という、挑発的な歌によって戦端は開かれた。一旦そういう趣向で、その地平が拓かれるや、以下はまさにその競い合い、「あだくらべ」と言うべきものとなった。「ありえないことシリーズ」であれ、「はかないシリーズ」であれ、二人はそうした趣向を暗黙のルールとして、ゲームを楽しんでいるかのようである。表現の大胆は、大胆を呼び、相乗的に展開した。結果として、それは、無常なるものの列挙、「あだ」なるものの、物尽しとなった。

それは、「従来物尽しの一つの特徴としてあげられた興味性、諧謔、知的遊戯の興味が發揮されている」（ジャクリーヌ・ピジョー『物尽し 日本のレトリックの伝統』）と言えるのではないか。五十段の「あだ」なる歌の遣り取りは、「知的遊戯」でもあったのである。

「あだくらべ」⁽³⁾とは、一面で「あそび」でもあった。「あそび」ならば、思い切ってやった方が楽しい道理である。

一方、前引十七段等によれば、「あだ」とはまた、不実、浮気のこと。すなわち、「あだくらべ」とは、浮気く

らべ、色事くらべということでもあった。物語結文にも、「男、女の、忍び歩きしけることなるべし」と言う。確かに、この段の二人は、相等の浮気者であった可能性が濃厚であったし、一連の歌の遣り取りは、そのまま恋の駆け引きであったとも見られる。それはまさしく、「愛の遊び」、「恋の戯れ」と呼ぶべきものであつた（拙稿「伊勢物語のあそび（承前）」、「文学」隔月刊第一卷第三号）て、何者にも囚われずに、大胆を競い合う、恋愛遊戯でもあったのである。

そこに無常への感傷など立ち入る余地は無かつた。

二二

そうした、無常に対する『伊勢物語』のあり方を、最も端的に示すのは、八十二段の次の歌であろう。

散ればこそいとゞ桜はめでたけれうき世に何か久しかるべき

惟喬親王の交野での狩に従つた一行の一人の、花見の酒宴での詠歌である。

昔、惟喬の親王と申す親王おはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごとの桜

の花盛りには、その宮へなむおはしましける。その時右の馬の頭なりける人を、常に率ておはしましけり。時世へて久しくなりにければ、その人の名忘れにけり。狩はねむごろにもせで、酒を飲みつゝ、やまと歌にか、れりけり。いま狩する交野の渚の家、その院の桜ことに面白し。その木の下に降り居て、枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌よみけり。馬の頭なりける人の詠める。

世の中に絶えて桜の無かりせば春の心はのどけからまし

となむ詠みたりける。また人の歌、

散ればこそ桜はいとゞめでたけれうき世に何か久しかるべき

とて、その木の下は立ちてかへるに、日暮になりぬ。御供なる人、酒を持たせて野より出で来たり。この酒を飲んでむとて、よき所をもとめゆくに、天の川といふところに到りぬ。親王に馬の頭大御酒まるる。親王ののたまひける、「交野を狩りて、天の川のほとりに到るを題にて、歌詠みて杯はさせ」とのたまうければ、かの馬の頭詠みて奉りける。

狩り暮らし柵機つ女に宿借らむ天の川原に我は来にけり

親王、歌をかへすぐ誦じ給うて、返しえし給はず。紀有常御供に仕うまつれり。それが返し、

一とせに一たび来ます君まては宿貸す人もあらじとぞ思ふ

かへりて宮に入らせ給ひぬ。夜ふくるまで酒飲み物語して、あるじの親王、酔ひて入り給ひなむとす。十一日の月もかくれなむとすれば、かの馬の頭の詠める。

飽かなくにまだきも月の隠るゝか山の端逃げて入れずもあらなむ

親王にかはりてたてまつりて、紀有常、

おしなべて峰もたひらになりな、む山の端無くば月も入らじを

春の行楽の一日、彼等は「その院の桜ことに面白し」という、渚の院の桜を賞でて、一時詠歌をたのしんだ。その折の、ある人の歌。この歌も「散る花」を嘆かない。むしろ、その散ることに、花のめでたさを見出そうとしている。

確かにここには、いたずらに無常を悲しまず、かえってそこにそれ故の意義を見出し、それを「めでたけれ」と、積極的に克服して行こうという自覚が強く示されている。これは、前章で採り上げた五十段の歌等とも共通する、『伊勢物語』の特質と言えるかも知れない。すなわちこれも、大胆と言うべきものであろう。

ここでは、人の世を襲う無常に対して、一切が変化し無常であるからこそ、かえってよいのだ、という発想の大胆と、係り結びを二つ重ね、さらにそれを反語で締め括るといふ表現の大胆とか、よく照応していると言えようか。

まさしく、「この歌には、無常に対して、いたずらに嘆き悲しむのではなく、それを積極的に受け入れてゆこうという「覚悟」が窺われる」。「無常にうつりゆく時の流れの中で、現在只今を謳歌しようとする。それは、無常のなかでの、生の一瞬の充実を志向するものではなかったか」（拙稿「古典文学に見る仏教思想 和歌」、『岩波講座日本文学と仏教 第九卷 古典文学と仏教』）。

藤井高尚『伊勢物語新釈』も、この歌の歌意を、

桜は結構なものなるが、散ればいと結構なれと思ふ也。そのゆゑは、この憂き事ある世に、どふしてか久しかるべき。利発なる桜なれば、早く見切りて散るもことわりなりと言へる意也。

としている。

栗田勇『花を旅する』も、この歌について、

散ってしまうからこそすばらしい、やや理が勝ったところはありますが、「うき世になにか久しかるべき」というところには、日本人的な季節感に諸行無常という仏教的な無常観が入ってきているのではないか。

（中略）

つまり、とことんまで咲ききって、ある時期が来たら一瞬にして、一斉に思い切って散っていく。こうした生ききって身を捨てるといふ散り際のよさが、日本人にはこたえられないのではないのでしょうか。「死に花を咲かす」といふことばさえあります。

と言う。

「とことんまで咲ききって、ある時期が来たら一瞬にして、一斉の思い切って散っていく」。「生ききって身を捨てるといふ散り際のよさ」⁽⁴⁾。そこに、無常への悲嘆はない⁽⁵⁾。

ただし、この歌は、実は八十二段、ある人の詠。それは恐らくは在原業平であろう「馬の頭なりける人」の詠歌、

世の中に絶えて桜の無かりせば春の心はのどけからまし

に対する返歌として詠まれたものであった。

ならば、その歌の主、『伊勢物語』の主人公、その人の歌の場合はいかがであったろうか。

この歌について、鈴木日出男『伊勢物語評解』は、次のように言う。

馬頭の唱和（独詠）。一首全体を構成するのは、「……せば……まし」の反実仮想の構文。もしも世の中から桜がなくなったら、という大胆な仮想を通して、逆に現実の真相をとらえる語法である。

「世の中に」の歌の反実仮想を、「大胆な仮想」と言う。高田祐彦『新版 古今和歌集 現代語訳付き』もまた、『古今和歌集』に収められた同じ歌について、「業平らしい、奇想外の大胆な仮定」としている。

竹岡正夫『古今和歌集全評釈』も、同じ歌について、次のような評解を与えている。

『余材抄』が「咲をまち、ちるををしみ、さかりなるほども雨もいとひ、かぜをいとひおそれなど、愛する

あまりに心のいとまなきより」詠んだと解しているのが素直で、従うべきである。さような事象を豪快に「世の中にたえて桜のなかりせば」と観念的に仮想してしまい、それを承けてこれも一挙に「春の心はのどけからまし」と結ぶところ、きわめて直線的に単純化されている。さらに細かく見ると、「世の中に」「たえて」といった語句は、一首全体の内容からいえば、なくてもよいものであり、「なかりせば」は調子からいって長く、「春の心」はこれ又はなほだ作者の実感からほど遠い概括的なとらえ方の語句である。業平の個性のよく出た歌である。

「世の中に」の歌は、「豪快に」「観念的に仮想してしまい」、「きわめて直線的に単純化されている」と言う。いずれも、この歌に特徴的な「……せば……まし」の反実仮想の構文」を、「大胆」と言い、「豪快」と言う。総じてこの歌も、大胆なものであったと評することが出来るであろう。

まさしくこれは、「散ればこそ」の歌の大胆に対応すると言い得るかも知れない。「世の中に絶えて桜のなかりせば」という、この印象的な反実仮想は、確かに五十段「あだくらべ」の反実仮想にも、勝るとも劣らない大胆なものと言い得るであろう。

八十二段の「馬の頭なりける人」の詠歌は、続く二首も奇想天外、氣宇壮大なものであった。

二次会、「天の川のほとり」での詠、

狩り暮らし柵機つ女に宿借らむ天の川原に我は来にけり

「天の川」の地名から、想像力は天界を翔り、「棚機つ女」に宿を乞うまでに至る。

三次会、「水無瀬」の宮に帰館しての詠。

飽かなくにまだきも月の隠るゝか山の端逃げて入れずもあらなむ

宴席を立てて寝所に入ろうとされた「惟喬の親王」を引き止めるに、親王を月に喩え、何と「山の端」を後退させようと言うのである。⁽⁶⁾かなり酒が入っていたとは言え、その発想は、やはり大胆と言うべきであろう。

とは言え、「世の中に絶えて桜のなかりせば」と言う、反実仮想に始まるこの歌。それは、どれほどに「大胆」、「豪快」と評すべき歌だったのであるか。

四

一首は、「世の中」に「桜」の無いことを仮想するところから始まる。ならば、何故、そう仮想するのか。

この反実仮想の結末は、「春の心はのだけからまし」。一方、その反実仮想に対する事実は、「世の中」に「桜」ある故に、「春の心」は「のだけからず」、ということになるであろう。この一首の反実仮想を裏返すならば、こ

の時の「馬の頭なりける人」の心は、「のどけ」くなかったことになる。とすればこの歌は、少くともその始発においては「大胆」、「豪快」などところから発するものではなかったということになるのではないか。

「その院の桜ことに面白し」という「桜の花盛り」を前に、彼の心は「のどけ」くなかった。ならば、何故、「のどけ」くなかったのか。

「この歌の桜は、まさしく親王の比喩である」（窪田空穂『伊勢物語評釈』）云々の寓意はさて置き、その直接的契機について、契沖『古今余材抄』は、桜を「愛するあまりに心いとまなきより」と言う。

同様の見解は同じく『勢語臆断』にも見える。

春来てはいつかと待ちて、咲けばうつろはんことを思ひ、雨をいとひ、風をうらみ、散り果てぬれば名残り
を思ふまで、春の心づかひ、のどかならぬによりて、春の心はのどけからましと、深く愛する心からかくは
詠み出せり。

諸注、多くこの解を襲うが、この解釈は『徒然草』十九段の主張に通うところがある。⁽⁷⁾

花もやうやうけしきだつほどこそあれ、折しも雨風うちつゞきて、心あわたしく散り過ぎぬ。青葉になり
行くまで、よろづにたゞ心のみぞ悩ます。

両者は恐らく無関係ではないであろう。しかし、それはいずれにしても、この『徒然草』の言葉を借りるならば、この時の「馬の頭なりける人」は「花」に「たゞ心をのみぞ悩ます」という状態であったと言い得るであろう。

諸書も、この解に従って、疑いを挟まない⁽⁸⁾。

俵万智『恋する伊勢物語』も、やはりそうした通説を、よく反映している。

……この世の中に、桜の花というものがもし全くなかったら、春の心は、のんびりとのどかであるのになあ……。

春になると私たちは、桜の開花はまだかまだかと待ちわびる。そして咲いたら咲いたで、妙にウキウキし、また、散りやしないかとハラハラする。風雨に弱いこの花は、心配どおりであったというまに終わってしまい、みんな、がっかり。まったく、人の心を騒がせる花だ。

わかつてはいるけれど、毎年のように、この「まだかまだか、ウキウキ、ハラハラ、がっかり」は、繰り返されるのである。

もちろん、右の一首は、本当に桜がなくなればいい、という意味のものではない。こんなにも私たちの心を乱す桜のはなであることよ、という言い方で、その魅力というものを、賛美しているわけである。

桜を前に、この男の心は、「まだかまだか、ウキウキ、ハラハラ、がっかり」と、「のどけ」くはなかった。

しかし、それは、それ故に「本当に桜がなくなればいい」と主張するものではなかった。それは「こんなにも私たちの心を乱す桜の花であることよ、という言い方で、その魅力というものを、賛美しているわけである」と反転して行くのである。⁽⁹⁾それは『勢語臆断』言うところの、桜を「深く愛する心からかくは詠み出せり」という理解に繋がって行く。すなわち、反実仮想によるこの歌は、桜を「深く愛する心から」、「春の心づかひ、のどかならぬによりて、春の心はのどけからましと」「詠み出」されたものだ、と。

しかし、果してそれでよいであろうか。「桜の花盛り」を目の当たりにしながら、「春来てはいつかと待ちて」から思い起こして、「春の心づかひ、のどかならぬ」と言うのは、些か迂遠なのではないか。まさしくそれこそが、「はなはだ作者の実感からほど遠い概括的なとらえ方」と言うべきものではないのか。

目崎徳衛『在原業平・小野小町』も、この歌について次のように言う。

さてこの歌は、試みに窪田空穂（『古今和歌集評釈』）の逐語訳を引けば、こんなことになる。

世の中に、もし一向に桜の花がなかったならば、春の季節におけるわが心は、落ちついて、のどかなものであろう。

何という興奮めする歌意であろう！しかし、どうか性急に意味を把えようとせずに、むしろ意味など度外視して幾度か口誦んでほしい。無残な語釈を拒絶する深い哀愁が、豊饒な調べを通して胸に滲み入っては来ないだろうか。

同じ窪田空穂『伊勢物語評釈』は、「桜花は盛りが短い上に、その咲く頃は風雨が多く、人を憧れさせる花は憧れにのみ終わらせようともするのである。その嘆きを詠んだもの」と説く。

「何という興奮めする歌意であろう!」。そんな、通り一遍の「概括的なとらえ方」をした歌を、彼は詠もうとしたのだろうか。そしてこの歌に、「無残な語釈を拒絶する深い哀愁」ありとすれば、一体それは、どこから来るのであろうか。

ここに、一つの参考として考えるべきは、この歌に対して詠まれた、ある人の歌である。

散ればこそいとゞ桜はめでたけれうき世に何か久しかるべき

この歌を、「世の中に」の歌への返歌としてもう一度見直してみる。

一首は、「散ればこそいとゞ桜はめでたけれ」と歌い出す。係り結びによる強調であるが、それは勿論、「世の中に」の歌を意識してのことであつたに違いない。

『伊勢物語新釈』は、前引の箇所先立って、次のように記している。

此の歌の意は、前の歌を承けて、桜の花の早く散るゆゑに、心のどかならず、わろし、とそこにはのたまへど、我はさやうに思はず。

「散ればこそ」「めでたけれ」と詠まれたのは、結局のところ、「前の歌」が「桜の花の早く散るゆゑに、心のどかならず、わろし」と歌つたことに対して、異議を唱えたものであつた、と言う。だとすれば、「前の歌」、「世の中に」の歌の「心のどかならず」の原因は、「桜の花の早く散るゆゑ」というところに求められるであろう。すなわち、「馬の頭なりける人」は、眼前の「桜」に、しかもそれが「花盛り」であるにも拘らず、その「花の早く散る」ことを想つたのである。少くとも「散ればこそ」と詠んで返したある人は、「世の中に」の歌を「花の早く散る」不安を詠じたものと受け取つた。

『伊勢物語新釈』は、「世の中に」の歌を、

桜の花の言ひ知らぬを賞づる心には、雨をいとひ、風をうらみ、散るを惜しみなど、心静かならず。もの思ふにつけて、一向に世の中に絶えて桜の咲かぬものならば、春の心はのどかにてよからんと言へる也。これはあまりに深く賞づるより、移ろふうらみの苦しさに、愚かにも、ふとかく思へる情を述べたる歌也。

と、通説を踏襲して解釈している。しかし、にも拘らず、「散ればこそ」の歌の理解において、「前の歌を承けて、桜の花の早く散るゆゑに」と言うのであれば、その解釈は、「世の中に」の歌に遡及されて然るべきなのではないか。とすれば、「世の中に」の歌において、この男の心は、「桜の花の早く散るゆゑに、心のどかならず」であつたことになる。

「桜の花の早く散るゆゑに、心のどかならず」ということを詠む歌は、その例少しとしない。

桜の花の散るを詠める

紀友則

久方の光のどけき春のひにしづ心なく花の散るらむ

(『古今和歌集』巻二・八四)

「のどけき」はずの「春のひ」に、「花の散る」、それは一体、どうしたことか。その情景を、「しづ心なし」と、この歌は歌う。

一般に、この「春のひ」の「ひ」は、暦日の「日」と解されているが、これは、同じ『古今和歌集』、

二条の後の東宮の御息所と聞えける時、

正月三日おまへに召して、仰せ言あるあひだに、

日は照りながら雪の頭に降りかゝりけるを詠ま

せ給ひける

文屋康秀

春のひの光に当る我なれど頭の雪となるぞわびしき

(巻一・八)

等に徴して、むしろ「陽、陽光、陽射し」、すなわち「春の陽」と解すべきではないか。⁽¹⁰⁾「春の陽の光に当る我なれど」と言う、この歌の言葉を借りるならば、「久方の光のどけき春のひに」は、「春の陽の光に当る花なれど」という意味を含意したものであったこととなる。「のんびりした春の陽に包まれながら、気ぜわしく桜が散り急ぐのはどうしたことか」。

「世の中に」の歌の「春の心」に対して「春の陽」、「のどけからまし」に対して「光のどけき」、「心のどかならず」を「しづ心なく花の散るらむ」と歌って、あたかも「世の中に」の歌を裏返したようなこの歌は、「桜の花の散るを詠める」もの。この歌の「心のどかならず」は、やはり「桜の花の早く散るゆゑ」であった。

桜の花の散りけるを詠みける

貫之

ことならば咲かずやはあらぬ桜花見る我さへにしづ心なし

〔古今和歌集〕卷二・八二

「桜花見る我」は、やはり「しづ心なし」と歌う。理由は無論、「桜の花の散りける」故。そこで貫之は、同じことならば咲かないでくれないかと、花に誂える。反実仮想という点では、これは「世の中に絶えて桜のなかりせば」にも通う。

あるいは、

待てといふに散らでしとまるものならば何を桜に思ひ益さまし

〔『古今和歌集』卷二・七〇〕

一首の仕立ては、「世の中に」の歌と同じ反実仮想の構文で、「何を桜に思ひ益」すのか、と問う。これも「桜」が「散らで」「とま」らぬ故である。それを何とか留めようと、この歌では、「待て」と桜に命じることが仮想した。

これに似た発想の歌は、『新撰萬葉集』にも見える。

散る花の待て、ふことを知らませば春は行くとも惜しまざらまし

（卷下・二六七）

あるいは、醍醐天皇『亭子院歌合』。

春風の吹かぬ世にだにあらませば心のどかに花は見てまし

いずれも同工異曲の反実仮想。「何を桜に思ひ益さまし」、「春は行くとも惜しまざらまし」、「心のどかに花は見てまし」。これらに、『伊勢物語』「春の心はのどけからまし」を対照させるならば、その歌わんとしたところも、自ら類推可能であろう。

人は、散る桜を見て、「心のどか」にはいられない。花の散るのを惜しみ、何とかそれを押し留めようと、あ

の手この手の策を弄する。「一体、どうして」と花に問い、「待て」と命ずる。あるいは、いっそ咲かなくてくれたらと妄想し、花を散らす「春風」の方を無くそうと夢想したりする。いずれも、反実仮想。こうして見るならば、「世の中に絶えて桜のなかりせば」の反実仮想も、「桜の花の早く散るゆゑ」のものであったことが、考えられて来る。

八十二段、「馬の頭なりける人」は、「桜の花の早く散るゆゑに、心のどかならず」という状態にあったのである。眼前の桜に、彼はふと、その花の散ることを想ったのである。今は爛漫と咲き誇る「桜の花盛り」ではあつても、その桜が散ってしまう不安に、彼は襲われたのではないか。「春の心はのどけからまし」と言う裏側には、今を盛りと咲き匂う桜もいつ何時散るか知れない、そういう不安や焦燥があつたのである。

しかし、ここに挙げた諸例は、いずれも桜の花が現に散っているところから詠み出されたものである。「世の中に」の歌だけが、独り、「桜の花盛り」にあつて、それにも拘らずに詠まれた歌であることは、やはり刮目して見るべきであろう。彼は満開の桜に落花を思った。全盛の中に、滅亡の不安を見たのである。それは、何といふ繊細な感受性であろう。むしろそれは、繊細過ぎる感受性と言うべきかも知れない。

忽ちに、同席のある人がそれに反応した。「我はさやうに思はず」。そんなことはない、散るからこそ、桜は見事なのだ。「この憂き事ある世に、どふしてか久しかるべき」。「早く見切りて散るもことわり」。

一座は、苟しくも惟喬親王を戴いた花見の宴である。座が不吉に流れてはいけない。ある人は即座に、「馬の頭なりける人」の弱気を引き取って、一座の気分を立て直そうとしたのである。

この歌について、『伊勢物語肖聞抄』以下古注では、「有常哥也」等として、このある人を、「紀有常」である

とする。「馬の頭なりける人」在原業平の舅に当る人である。彼はこの段では、終始女婿業平の諫め役、なだめ役を務めている。

二次会、業平の「狩り暮らし柵機つ女に宿借らむ」の歌に対して、彼は、惟喬親王の窮地を救いつつ、

一とせに一たび来ます君待てば宿貸す人もあらじとぞ思ふ

と切り返した。「柵機つ女」は、「一とせに一たび来ます」宮様をお待ちしているのだから、あなた如きに宿を貸すような人などいるはずもない。有常は「柵機つ女に宿借らむ」という、業平の大袈裟な気負いの一枚上を行って、当日の主賓惟喬親王を、彦星に見立てて持ち上げたのである。

続く、三次会。「山の端逃げて入れずもあらなむ」。業平は、「飽かなくにまだきも月の隠るゝか」と、惟喬親王を月に譬えた上で、さらに思い切った譬喩を弄んで、親王を引き止めようとした。しかし、宮様はすでにお疲れ。苦勞人の有常は、業平の譬喩に輪をかけた豪胆さで、それに応じた。

おしなべて峰もたひらになりな、む山の端無くば月も入らじを

「山の端逃げて」は愚か、「山の端無くば」と仮想した。「逃げて」ではまだまだ、同じ言うなら、無くしてしまえぐらい言ったらどうか、と言うのであろう。「山の端逃げて」が無理だとすれば、「山の端無くば」というの

は一層有り得ることではない。だとしたら、月の入るのを留めるのは無理、ということになる。何をしても無理ならば、致し方無い。ここに、親王は心置きなく寝所に入ることが出来た。終わりよければすべてよし。永かつた春の一日も、こうして無事幕を降ろすことになったのである。

こうして見るならば、この段で業平は案に相違して気弱なところを垣間見せる。同じ反実仮想でも、有常は「桜」は愚か、「山の端」まで無くしてしまう。一回りも二回りも豪胆と言うべきは、舅有常の方であった。

「世の中に絶えて桜の無かりせば」。

満開の桜に、その散ることを想う、とは感傷である。

「ゆく水とすぐるよはひと散る花と」と歌った勇ましきここには無い。「桜花今日こそかくは匂ふとも」と言う強気の攻めも無い。恋においては、その胆、大にして盤石の気概を持って突き進む『伊勢物語』の男も、一方ではこのように意外に繊細懦弱な一面を見せるのである。

五

そもそも、一首の歌い出し、「世の中に」の「世の中」とは、いかなるものであったのか。「世の中にたえて桜の無かりせば」と言うのは、果して「もしも世の中から桜がなくなったら、という大胆な仮想」と言うべきものであったのか。

「世の中」。

『萬葉集』において、「よのなか」は、多く「世間」と表記される。

世間よのなかを常無きものと今ぞ知る奈良の都のうつろふ見れば

(巻六・一〇四五)

世間よのなかの常無きことは知るらむを心尽すなますらをにして

(大伴家持・巻十九・四二一六)

「世の中」即「世間」。そして、その「世間よのなか」は、「常無し」とされた。すなわち、前引大伴家持の嘆じた、「世間無常」である。家持はその「世間無常」を、「世の中は常無きもの」と「悲し」んだ。

「世間無常」とは、当時の仏教の力説するところ。「世間無常」の句は、『仏説長阿含経』、『大般涅槃経』、『雑阿含経』、『大般若波羅蜜多経』、『魔訶般若波羅蜜多経』、『大方広仏華嚴経』等の仏典に頻出する。

世間という言葉を日本にもたらしたのは漢訳經典である。だからそれは最初仏教哲学における一定の概念を担った言葉であった。この哲学の根本命題は「世間無常」である。世間は無常といふ賓辞に限定せられたものとしてのみ把握せられる。かかる事情の下に日本人は、千数百年前に、「世間虚仮、唯仏是真」(上宮聖徳法王帝説。天寿国繡帳銘文)という意味において世間の概念を受け取った。

(和辻哲郎『人間の学としての倫理学』)

そして、その「世間無常」の感受性は、『古今和歌集』の歌にも受け継がれて行く。

恋ひ死なば誰が名は立たじ世の中の常無きものと言ひはなすとも

（清原深養父・卷十二・二六〇三）

世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬となる

（卷十八・九三三）

「世間」は「無常」。つまり、「世の中」とは、無常の世の中なのであった。

とすれば、『伊勢物語』「世の中にたえて桜の無かりせば」と言う、その「世の中」とは、一般に言う「概括的」な「世の中」ではなくて、「常無し」、「無常」に直結するところの「世の中」であったことになる。⁽¹⁾

すなわち、「世の中にたえて桜の無かりせば」と言うのは、桜を「愛するあまり」、その非在を「観念的に仮想し」たような類のものではない。同時にそれは、結果的にそうなるにしても、桜への愛着を強調するために、「もしも世の中から桜が無くなったら」と一時的に仮想してみるといふ、言わば思考実験を仮構したようなものでもなかった。

「世の中」、無常の定めから逃れられないこの世にある以上、やがて花も散る。この歌は、それを予感するときの、不安と焦燥を詠もうとするものではなかったか。「桜の花の早く散るゆゑに、心のどかならず」。いつそ、その桜が無くなったなら、その不安と焦燥も消えようけれど…。

世の中に絶えて桜の無かりせば春の心はのどけからまし

それは、もの皆移ろう、この無常の世から、すっかり桜が消えて無くなってしまったなら、その移ろい散るのに平静ではいられない、この春の心はのどかであろうものを、しかし、それは叶わぬことだから、心騒ぎを抑えることはとてもできない、というほどの歌意になろうか。

この歌についての、「はなはだ作者の実感からほど遠い概括的なとらえ方」という評は、「世の中」の語の、それこそ「概括的」な理解に因るものではなかったか。

「世の中に」。

彼は、「桜の花盛り」に、無常、すなわち花の散ることを想った。桜の花の満開の只中に、無常を感じたのである。⁽¹²⁾

それはまさしく繊細にして懦弱な感性と言うべきものであろう。

しかし、『伊勢物語』の男は、何しろ人一倍敏感な男なのであった。過ぎて行く月日にさえ、平静ではいられなかった。⁽¹³⁾

昔、月日のゆくをさへ嘆く男、三月つごもりがたに、

をしめども春のかぎりの今日の日の夕暮にさへなりにけるかな

(九十一段)

そして、その月日が重なれば老いとなる。それもまた、この男の感傷を刺激する。

昔、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども集りて、月を見て、それがなかにひとり、

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人の老いとなるもの

（八十八段）

男は、友と共に名月を賞でても、独り感傷に囚われるのであった。

さらに、老いの先には死が控える。死に瀕する母からの危急の便りに、周章狼狽、この男が人世の無常を痛感するのも当然であろう。

昔、男ありけり。身はいやしながら、母なむ宮なりける。その母、長岡といふところに住み給ひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるに、十二月ばかりに、とみのこととて、御ふみあり。おどろきて見れば、歌あり。

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよく見まくほしき君かな
かの子、いたうち泣きてよめる。

世の中にさらぬ別れの無くもがな千代もといのる人の子のため

（八十四段）

無論、歌に詠まれた「世の中」とは、「世間無常」の「世の中」である。

諸注の、

我が上を言はず、世間の人の子の心を言へる玄妙なり。かく言へるうちに、我が事はこもれり。

（『古今栄雅抄』）

という類の、冗長な解釈は、ここには当らないであろう。

渡辺実『新潮日本古典集成 伊勢物語』も、この、男の返歌を、「母の長寿を祈る詠だが、概念的な歌」とする。

『古今集』にも載っている著名な贈答であるが、贈歌の実感に答歌が追いつけないでいる感じが強い。息子に会いたくてたまらない母親と、仕事に忙しい息子との、食い違いがあるように見える。

「世の中に」の答歌が、概念的な詠にとどまったのも、やむを得ぬことかも知れない。

しかし、男の返歌を「概念的」と言うのは、これまた「世の中」の語を、「世の中に死という避けられぬ別れがなければよいのに。」と、それこそ「概念的な」意味に捉えたことに起因する誤解と云うべきであろう。⁽¹⁴⁾

「世間無常」。母親からの危急の便りを受けて、「世の中」の無常を痛感する息子の心情を想うとき、その「世の中に」、「さらぬ別れの無くもがな」と詠じるしかなかった彼の願いは、いよいよ哀切なものであったと理解されよう。

そして、八十四段「世の中に」の歌をこのように解するとき、この歌が八十二段「世の中に」の歌と殆ど同じ構造をとるものであったことに、あらためて気付かされるであろう。

すなわち、「世の中に」という歌い出し、これが共に「世間無常」の「世の中」であること言うまでもない。そして、その「世の中」にあつては、花にも人にも「さらぬ別れ」の必然であること。そしてそれへの不安と焦燥。さらにその不安ごと、「桜」も「さらぬ別れ」も無くなってしまふことを夢想する……。

「世間無常」。花は散り、人は死ぬ。人事、自然いずれにしても、「世の中」の無常の現実を感じる時、男は、平静ではいられなかった。彼は、その想いをただただ歌にする他になかったのである。

だから、「世の中に」の句に始まる両首は、それぞれ、人事自然、「世の中」の「無常」を嘆じた、この男の絶唱なのであった。

それを、「概括的」、「概念的」等と評することは、まったく当らないであろう。

世の中にさらぬ別れの無くもがな

男は、母の死の前に、「世の中」の無常を感じて、悲痛であった。

しかし、

世の中に絶えて桜の無かりせば

とは、どうであろう。彼は「桜の花盛り」に、その無常を想う。母の死と同じ水準で、花の散ることを想って平静を失うのである。⁽¹⁵⁾

何と言う、繊細懦弱。

すなわち、恋の大胆とは裏腹の、この男の小心である。

注

(1) 「ゆく水に数書く」ことの典拠として、『涅槃経』、「是身無常」、「亦如画水、随書随合」等が指摘されている。一方、水の上に文字を書いた人もいる。弘法大師空海である。例えば、東寺藏『弘法大師行状絵詞』には、「童申さく「然あれば、その流水に字を書き給ひてむや」と。大師則ち彼が言葉に従ひて清水を讀する詩を書き給ふに、文点乱れずして流れ下りけり」等とある。

(2) 紀友則の詠、

入る月を山の端逃げて入れずとも（人の心をいかゞ頼まむ）

は、『伊勢物語』八十二段、

飽かなくにまだきも月の隠るゝか山の端逃げて入れずもあらなむ
に扱るか。

(3) 「くらべ」とは、「競ふ遊戯に」「ツこ」「ツくら」と促音のはいつた接尾語を有する」と言う、「ツこ」「ツくら」の
祖形であった（前田勇『兎戯叢考』）。

次 勝負ノ事ニハシリクヲ ミチコクラナイヘル クラ如何（中略）クラヘラクヲトハカリイヘル歟

（『名語記』）

従つて、「あだくらべ」とは、「あだつくら」、「あだごっこ」とも言うべき「勝負ノ事」、すなわち「あそび」であつた。

(4) 大岡信も、この歌に似る、『古今和歌集』、

残りなく散るぞめでたき桜花ありて世の中果ての憂ければ

（巻二・七二）

の歌について、

これはおもしろい歌だと思います、桜の花の散るのを惜しむという歌はたくさんありますが、この歌は散るとい
う桜の花の特徴を惜しむ形でなくて、むしろ散るのならば全部さつさと散つてくれ、というふうに言つていま
す。実はそう言う形で散る花を惜しんでいるのですが、この歌そのものの表にあらわれた意味としてはむしろ逆
で、残りなくすつかり散つてしまうのが実にめでたい、桜の花というのはそういうものだ、というのです。実際
桜の花は、花が咲いてあまり長い期間はとどまっています。そして散りはじめるとあつというまに散る。それ
がまた次から次に果しなく散るように感じられる。そしてたちまち散り尽してしまいます。そういうところが一

種のいさぎよさを感じさせる花なのですが、このよみ人しらずの歌の作者もそういうことを実感に即して感じていて、それでこの歌をつくっています、桜の花が仮に少しずつ散っていつまでもいつまでも残っている状態だったら、かえって醜いと感じている。それは下の句「ありて世の中はてのうければ」というところに出ています。

「ありて」は桜の花がそのまま残っていたら、ということです。言いかえると桜の花だけではなくて、そのうしろには、人間というものは……という気持ちもあります。永らえていると世の中に起きるいろいろな事柄は終りが醜くなるものであるから、というふうな気分もうたわれています。「はてのうければ」は終りが醜いものだから、という意味です。この歌の背景としてはおそらく仏教的思想もあるだろうと思いますが、そこまで言わなくても、生活して来て、体験的にどうも人間というのはいつまでも命にしがみついて永らえていると終りはあまりよろしくないことがある、ということ、作者は自分の知恵としてもっていて、このような歌をつくったのではないかと思われます。

いずれにしても、歌としてそう目立つ歌ではないのですが、読んでみると気にかかる歌です。人生の過ごし方について、ある種の刺を含んだ思想をも自分の腹に収めた上で、桜の花がさっさと散り急いでいる姿を、そうだそうだ、散るんならさあつときれいに散ってくれ、と言っているような気がいたします。背後に人生が感じられる歌です。

〔四季の歌 恋の歌 古今集を読む〕

と述べている。

(5) これは、

化野の露消ゆる時なく、鳥辺山の煙立ちも去らでのみ住み果つるならひならば、いかにもの、あはれもなからむ。世は定め無きこそいみじけれ。

〔徒然草〕第七段

花はあだに散り萎れ侍ればこそ、心なき世の無常もす、め侍れ。もし散らぬものならば、うたて侍るべし。

（心敬『芝草』）

等に展開して行く。

ただし、佐竹昭広「自然観の祖型」（『萬葉集再読』）は、『徒然草』のこの段を引き、「この自然観、「祈りふしの移りかはる」を「あはれ」と観照するこの美意識を、「うつろひの美学」と呼ぶことに誰しも異論はないであろう」と言い、「信仰的趣味的草庵」の自然観は、兼好法師に至ってついに極点を極めた」とした。そして、「信仰的趣味的草庵」に先立つ、石田貞吉の、いわゆる「初期草庵」「信仰的草庵」の段階にあつては、「飛花落葉に人生の無常を観ずる思念はあつても、飛花落葉の自然を楽しむ境地は開けていない」と言う。

（6）三木雅博「嶋田忠臣と在原業平—漢詩が和歌を意識し始めた頃—」（『平安朝漢文学鉤沈』所収）には、「あつという間に西へ傾く月を、何とか沈ませないようにしたいというような表現」の類例が探査されている。

（7）中務、

咲けば散る咲かねば恋し山桜思ひ絶えせぬ花のうへかな

（『拾遺和歌集』巻一・三六）

も、これに近い。

（8）この解釈は、この「世の中に」の歌を題として詠まれた、慈円「詠百首和歌」

以古今為其題目、

春の心のどけしとても何かせむ絶えて桜の無き世なりせば

（『拾玉集』巻三・三四八〇）

に溯る。

（9）鈴木日出男『伊勢物語全評釈』は、前引の箇所にかけて、

「春の心」は、生命をよみがえらせた春の景物にとりこまれた人間の、その時節を過ぎす落ち着きがたい心。「の

どけし」どころか、その逆だとする。一首は、桜がいつ咲いていつ散るかを気づかずにはいられぬ、春の自然環境に置かれた人間の気ぜわしい心を通して、桜の美を賛えた歌である。

と言う。

(10) なお、大伴家持、

うらうらに照れる春日に雲雀上がり心悲しもひとりし思へば

〔萬葉集〕卷十九・四二九二

左註「春日遅々としてに鶴鴈正に啼く」参照。

(11) 『萬葉集』にも、「世間無常」の世の中にあつて、桜の花の散るのを想う歌があつた。

世間よあなも常にしあらねば宿にある桜の花の散れる頃かも

(久米女郎・卷八・一四五九)

(12) 鈴木日出男『伊勢物語全評釈』も、「桜花爛漫の耽美のなかに得体の知れぬ無常のかげりを、俊敏に感じ取つてしまったのだ」と言う。その一方、「期待のあまり開花前からじっとしていられなかつたのに、いざ咲きはじめるや、すぐに散るのを氣遣わねばならない。その心の休む暇とてない気持ち、反実仮想の構文によつて言い表している」、「現世の無常をはじめから意図した歌ではない。桜花への執着が思わず世の理を見つめてしまった、というべきであろう」とも言う。

(13) これは、八十段、

昔、衰へたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり。三月のつごもりに、その日雨そほふるに、人の元へ折りて奉らすとて、

ぬれつ、ぞしひて折つる年のうちに春はいくかもあらじと思へば
にも通うであらう。

(14) 俵万智『恋する伊勢物語』も、この男の返歌を、「概念的」と言う。

息子のほうも、涙をうかべて、心をこめて返歌を詠むのだが、迫力には今ひとつ欠けるような感じがする。（中略）

「なくもがな」という一番お手軽な願望の表現をとっているところが、読者へのインパクトに欠ける理由だろう。

もう一つ「千代もといのる」という月並みなフレーズが、一首全体を概念的なものにしてしまっているのも見逃せない。

この評言が当たらないこと、同様である。

(15) 春の花に死を想った歌が、大伴家持にあった。

世の中は数なきものか春花の散りのまがひに死ぬべき思へば
〔萬葉集〕卷十七・三九六三

ただし、これは「枉疾に沈みて殆と泉路に臨む」という状況のものであったし、「春花」は「散」っている。

なお、『和泉式部集』（榊原本）、「世間よのなかにあらまほしき事」、

おしなべて花はさくらになしはて、ちるてふことのなからましかば
(三三七)

世中にうき身はなくてをしと思ふ人の命をとゞめましかば
(三三八)

参照。

付記 本稿成るに当って、令和三・四年度成城大学特別研究助成を受けた。